

150  
523

承陽大師御畧傳  
及  
御和讚

019540-000-7

特16-532

承陽大師御略伝及御和讚

大内 青巒 / 著

M26.9

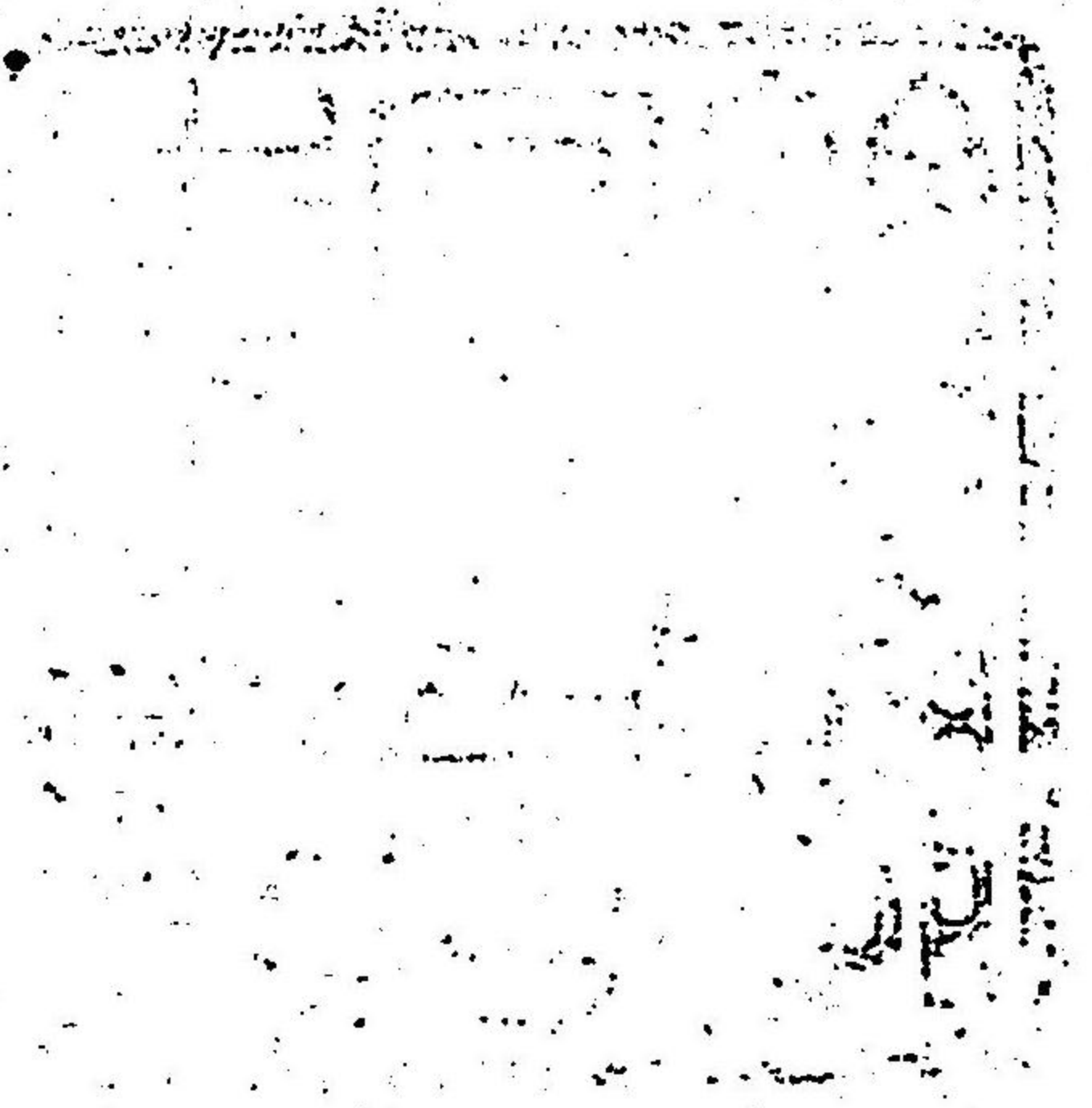
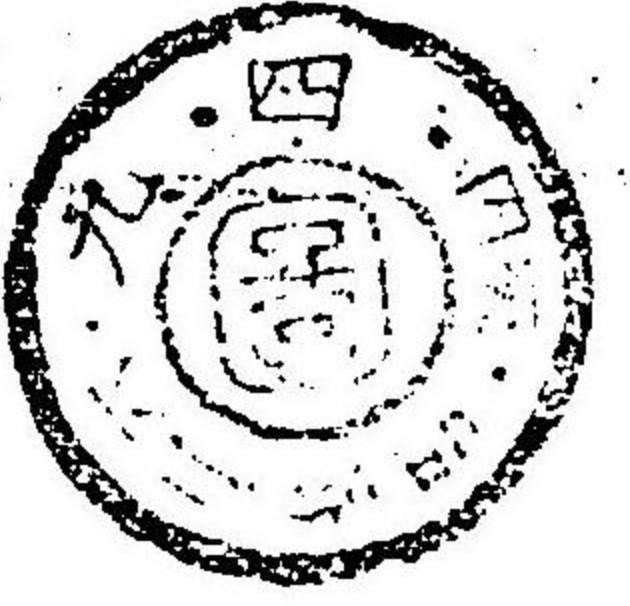
ABG-0306



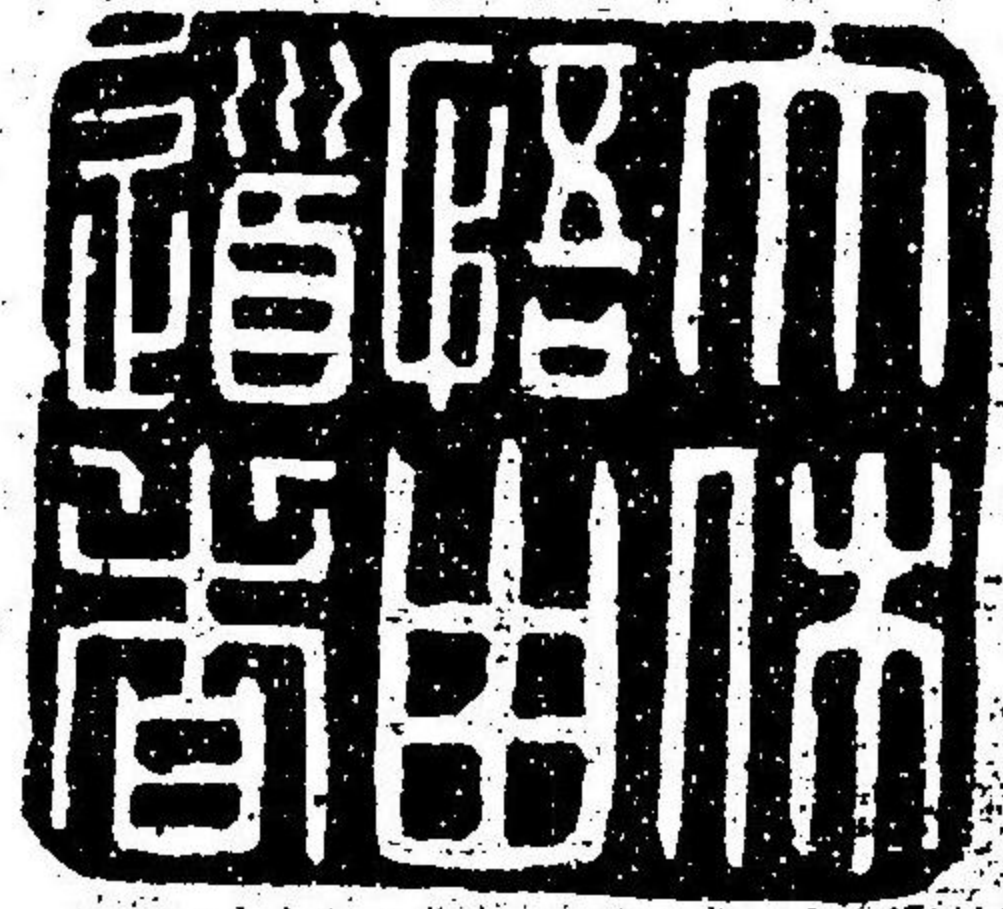
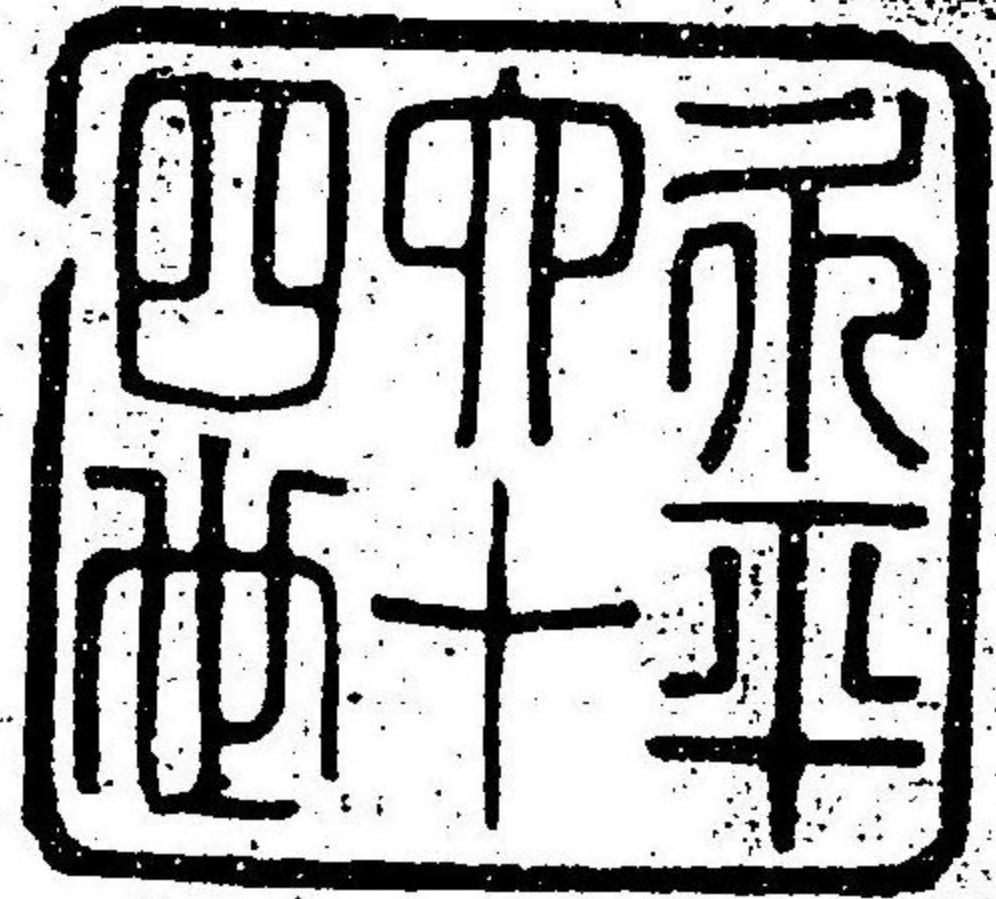
Calligraphic characters in seal script, likely reading '張氏' (Zhang family name).

Calligraphic characters in seal script, likely reading '張氏' (Zhang family name).

張氏印 (Seal of the Zhang family)



承平親王



○承陽大師御父方御系圖

○村上天皇

人皇六十二代

具平親王

二品中務卿

師房

從一

位太政大臣  
(始賜源姓)

顯房

從一位左大臣

雅實

從一位太政大臣  
(久我家之祖)

雅定

右大臣

雅通

從一位太政大臣

通親

內大臣

通具

大納言

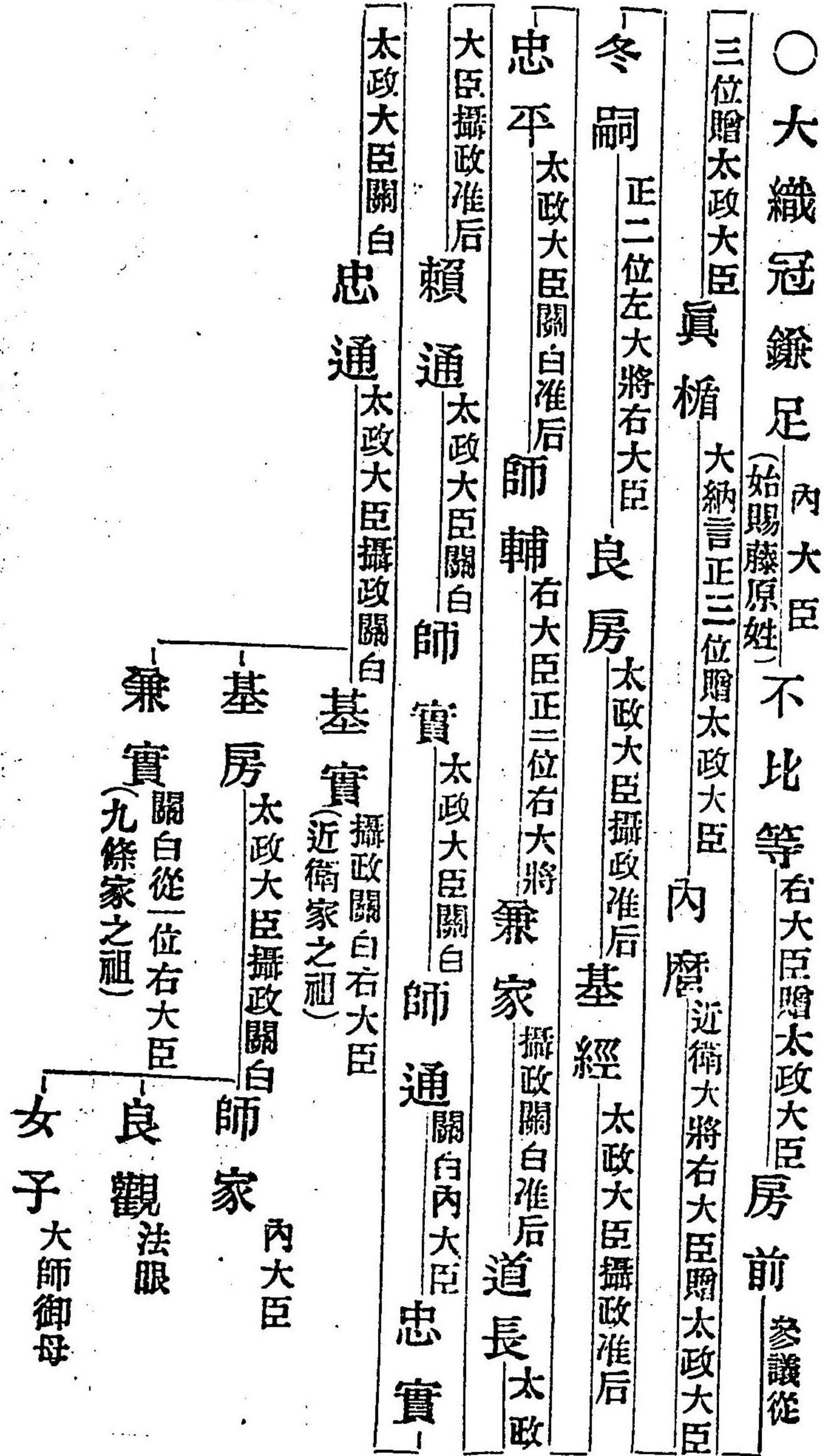
通光

太政大臣

承陽大師

○大

○承陽大師御母方御系圖



承陽大師御畧傳 及 御和讚

○承陽大師御畧傳

謹んで、大日本國曹洞宗高祖越前吉田郡永平寺開山佛性傳東國師承陽大師道元大和尚の御履歷を原ねたてまつるに御俗姓は人皇第六十二代村上天皇九世の孫久我内大臣源通親公の御三男にて御母は松殿關白太政大臣藤原基房公の御女なり頃は土御門院の御宇正治二年庚申正月二日に御誕生まじませしが眼に重瞳ありて七處平満し自から聖人の相をあらたまひけり然れば四歳建仁三年癸亥にして李嶠の百詠を讀み七歳承元にして毛詩左傳を讀みたまふなど世に比類なく生立たまひけり而るに八歳承元丙寅に逝去させたまひければ流石に恩愛の悲涙に沈ませたまひ終夜其御枕上坐せしが焼たる香の煙立ち立ては消え立ては消る有様をつくぐと見なはし浮世の中の無常なること皆此煙にことならず有ると見るまに空きを何事よか執着してはかなき榮花を求むべき早く出家得道して無上菩提の悟を開き一切衆生をも濟度せんとの大願心を發した

まひしこそ尊とふけれ然れば九歳承元二の御時より世親菩薩の俱舍論を初め内典外典に  
渉りて御學問おこたらせたまはざるも皆是れ我等が如き衆生の迷を救ひたまはんと  
御心なりとは知る人更にあらざれば御母の兄君にて松殿攝政師家公と申し奉つれる御  
方は善き姪もちたり我子となして攝政關白の重職をも繼ぎめばやと思し召すを中々に  
うるさくや覺しけん遂に十三歳建曆二の春の夜に私に都を忍び出で同く御母の御兄にて  
比叡山よおはす良觀法眼の許に到り切に出家を求めたまひしかば法眼いたく驚きたま  
ひ近き内に元服と聞侍りしにどのたまふを打消したまひて母人御臨終の御遺言もお  
ぼろげならず且つは浮世の榮花なぞ願ふべきも非すとて發心堅固にましませば法眼そ  
いろに感涙を濺ぎたまひて頓て横川首楞嚴院の千光房へぞ登せたまひける斯て其翌年  
建保元年癸酉 四月九日天台の座主公圓僧正に得度を受け十日に比叡の戒壇にて菩薩戒を  
受たまふ是より天台八教の學問は更なり秘密一乘の教理をも深く探り精く求め夜を日  
も繼て勵みたまひしが十五歳建保二の御時よ一つの御疑をぞ發したまひける其は何れ  
の經論の道理もも本來本法性天然自性身とて我等一切衆生の身が此身此體天然の佛な  
るぞと説きたまふことなるが若し生れつきたる儘が直に佛なりと云はれ三世の諸佛を  
始め奉つり我々に至るまで何とて發心修行して偕て其後成佛することなるぞとの御  
疑なり其頃三井寺の公胤僧正の天下に比類なき學匠なりとの聞え高かりければ往て此  
義を問ひたまひしに僧正頭を傾けたまひ此義は軟く答ひ難し建仁寺の榮西禪師も問ふ  
こそよからめ禪師の先年唐土より歸らせたまひて教外別傳の宗旨を弘めたまへり疾く  
往て問ひたまひとぞのたまひける然れば是より建仁寺に赴きて初て禪宗を學びたまひ  
し翌年建保三年乙亥 七月五日と云ふに榮西禪師は入寂せたまひしかば其御弟子なる明  
全和尚も隨從して愈々禪宗の修行を勵み又一切經をも二度まで讀せたまひしかど迎も  
日本にての吾が師とたのみ參らすべき人あらじ寧ろ唐土へ渡りて正法の師を得ばやと  
の廣大なる悲願心をぞ起したまひける斯くて廿四歳貞徳二の春二月二十二日に明全和  
尚に従ひて京都を出立たまひ三月下旬に筑前の博多の津より船出して大宋の嘉定十六  
年癸未 四月の初に唐土明州の港に着きたまひしが暫しが程は船におはして諸寺諸山の様  
子を探りたまひ遂に七月天童山に錫を掛たまへり此時天童山には無際了派禪師と云る

るぞと説きたまふことなるが若し生れつきたる儘が直に佛なりと云はれ三世の諸佛を  
始め奉つり我々に至るまで何とて發心修行して偕て其後成佛することなるぞとの御  
疑なり其頃三井寺の公胤僧正の天下に比類なき學匠なりとの聞え高かりければ往て此  
義を問ひたまひしに僧正頭を傾けたまひ此義は軟く答ひ難し建仁寺の榮西禪師も問ふ  
こそよからめ禪師の先年唐土より歸らせたまひて教外別傳の宗旨を弘めたまへり疾く  
往て問ひたまひとぞのたまひける然れば是より建仁寺に赴きて初て禪宗を學びたまひ  
し翌年建保三年乙亥 七月五日と云ふに榮西禪師は入寂せたまひしかば其御弟子なる明  
全和尚も隨從して愈々禪宗の修行を勵み又一切經をも二度まで讀せたまひしかど迎も  
日本にての吾が師とたのみ參らすべき人あらじ寧ろ唐土へ渡りて正法の師を得ばやと  
の廣大なる悲願心をぞ起したまひける斯くて廿四歳貞徳二の春二月二十二日に明全和  
尚に従ひて京都を出立たまひ三月下旬に筑前の博多の津より船出して大宋の嘉定十六  
年癸未 四月の初に唐土明州の港に着きたまひしが暫しが程は船におはして諸寺諸山の様  
子を探りたまひ遂に七月天童山に錫を掛たまへり此時天童山には無際了派禪師と云る

知識おはせしが日本の人を賤みて明全和尚も大師をも唐土の僧の末席にのみ坐せしめければ大師大に憤ふらせたまひ凡そ佛法に入て戒を受たる者は其受戒の順序よて坐を定むべきに他國の人とて末席に置くは法に背けり勅語を以て之を正したまへてよと二度まで宋の天子に上表したまひしかば遂に天童山に勅語し法の如くに坐位を正さしめたまへり是より大師の御名四方に聞えて昔より空海最澄など云る高僧も多く渡りたまひしが斯ばかり法を重んじ且つ日本の國の光を唐土に輝かせしはあらずとて人々驚嘆したりけり其頃天童山に隆禪と云る日本の僧ありて傳藏主と云る人の所持せる嗣書を大師に見せまへらせ又惟一西堂と云る人も宗月長老と云る人も皆嗣書を見せまへらせけり此嗣書と云ふの釋迦牟尼如來より迦葉尊者へ正法を傳へ迦葉より阿難阿難より商那和修と代々相傳へて二十八代達磨大師に至り達磨より慧可慧可より僧璨と又代々傳へたる正法傳授の血脈もて他宗他門には其名をだも聞くこと能はざる者なれば唐土に來りて禪宗を學べばこそ斯る見難き者をも見て傳授正き佛法を聞くことを得たるなれとて深く喜びたまひけり又或時は僧堂の内にて隣單に坐せる僧の袈裟を頂戴て掛る

を見て袈裟の功德を感じたまひ又或時は三韓より來れる僧の袈裟をも鉢をも知らずして在家の人の如くなるを見たまひ唐土に來らずは我も眞の佛法を知ること能はざりけんとて且つ慚ぢ且つ喜びたまふことも多かりし斯くて二年が程も天童山におはせしかば無際了派禪師より屢々悟道の許可を受たまひしかと自ら之を肯ひたまはず遂に天童山を下りて徑山に登り又育王山萬年寺など云る名山巨刹を巡りたまひて多くの知識を見えたまひしが是ぞ師範と頼むべき大善知識も逢ひたまはねば再び天童山へ版りて無際禪師を訪ひまへらせんとおぼせしに禪師は既に入寂せたまひしと聞て大に歎かせたまひしが去らば日本へ版るべし天童山におはす明全和尚は何にしたまひしやらん右も左も彼山にとて赴きたまふ折から老璣と云る僧の話の聞けば今の天童山の住持なる如淨禪師こそ天下に雙なき大善知識なれ疾く往て見えたまへと勧めしかば急ぎ天童山に登りたまひて如淨禪師に見えたまひしに禪師直に告てのたまはく佛々祖々面授の法門現成せりと是れ大宋の寶慶元年乙酉西曆大師年五月一日のことなりけり此時如淨禪師又左右の人に告てのたまはく昨夜洞山悟本大師を迎ふると夢みたり此日本の僧忍らくん

大師の再來なるべし我宗此人も憑て大隆ならんとて喜びせたまひしとぞ斯て明全  
 和尚を訪ひたまひしに和尚先頃より重病に打臥したまひしかば大師の訪ひまへらせし  
 を喜びたまふこと大方ならず然るに是月七日と云ふに四十二歳を一期として遂に遷化  
 したまひしかば其遺骸を火葬して舍利を供養したまひけり是より親く如淨禪師も參問  
 し日夜を分かす辨道修行したまひし様の寶慶記も委く記したまひしかば志あらん人は  
 彼書を拜讀して祖師の御恩の廣大無邊なることを知らるべし斯くて或日の事なりしが  
 一人の僧の坐睡せしを如淨禪師が痛く呵りたまひしを大師その傍みて聞たまひ豁然と  
 して無上菩提の悟を開きたまひしかば直方丈より上りて如淨禪師の印可を受けたまひ  
 同く九月十八日に佛祖正傳の大戒を受たまひしが是れ實に釋迦牟尼如來より第五十一  
 代の正傳にて嫡々相承の大事なりし斯て翌年寶慶二年丙戌も又其翌年も彼國におはしまして  
 江西其他の處にも遊歴したまひ寶慶三年丁亥の冬に至りて歸國の旅装をなしたまひ如淨  
 禪師に暇を乞たまひしかば其夜の夜半より入室せしめたまひ芙蓉道楷禪師より傳はれる  
 袈裟及び寶鏡三昧五位顯訣ならびに禪師自贊の畫像など與へたまひて離別の垂誠懇切

なりと斯くて大師は殘るかたなく所願満足せさせたまひ愈々明日は日本へ歸る旅路  
 に登らんと支度を調ひたまひたる其日の薄暮も偶々佛果圓悟禪師の碧巖集百則十  
 卷を見たまひ一夜の間之を寫したまひしを世に一夜碧巖と稱して最とも崇とみ重ん  
 じて今に加州の大乗寺に秘藏せり大師が此の碧巖集を寫したまひし其夜半に白衣の神  
 人來りて助筆せりとして墨色も二つに分れたるが其白衣の神人は加賀の白山權現におわ  
 せしと言傳へたり偕て翌日天童山を下りて此冬直に船出したまひしが海上にて海風荒  
 く既に御船も危ふかりしに大師普門品を念じたまへば觀世音菩薩一葉の蓮に乗せたま  
 ひて浪間に浮びたまへりと見るまに風止み浪おさまりて程なく肥後の川尻に着船した  
 まひしは最と不思議なる事なりけり此時日本安貞元年丁亥なり斯て大師は是より直ち京都に上り東  
 山の建仁寺に三年が程を経たまひけり其後寛喜年間には深艸の安養院と云るに閑居し  
 たまひ其地に極樂寺と云る寺の舊跡ありしを興したまひて天福元年癸巳大師年三十四の春に  
 興聖寺を建立したまひ其夏初て結制安居し嘉禎二年丙申大師年三十七の冬の初に開堂の法式を  
 行ひたまひ孤雲懷奘禪師を首座に請して極月三十日乘拂説法を行はしめられたり此

孤雲禪師と申したてまつれるは元と天台宗の學匠なりしが大師の御徳も皈依しませ文曆元年甲午のとしは初て大師の御弟子となり此冬首座となりたまひ遂に大師の御法脈を継せたまひて後に永平寺の二代禪師とならせたまひしたり仁治二年壬寅大師四十三歳又首座と云ふことも日本にては此時初て立られたることなりとぞ斯くて興聖寺の御化導十年が程を経たりければ出家在家の人々數多まへりて御教を受たる中に淨土宗の三祖鎌倉光明寺の開山記主禪師良忠上人同く京の九品寺覺明上人臨濟宗の由良興國寺開山法燈國師其他門の人々の道を問ひ法を開たまひしも甚だ多く遂に宗旨を改め衣を正て御弟子とありしも少から老肥後の大慈寺開山寒巖義尹禪師の如きは後鳥羽天皇の御子よて初め天台の僧なりしが大師に皈依しまへらせて仁治二年の事とかよ遂に大事を授りたまひ後に大師の御法孫なる徹通禪師の法脈を継ぎたまへり又是年の四月と云ふに近衛殿の御招請よ赴きたまひ御法談ありけるが近衛殿の問せたまへるや禪宗と云るは昔より我國に傳はりしことありしよやとありければ我國に佛法初て渡りしより四百年餘になりぬれと唯名と相とのみの佛法にて鎮護國家など云へる祈りの僧のみ多かり

ければ眞の佛法の傳はれるは今を始となすべきにや昔し唐土に佛法の初て渡りしときも四百年が程は名と相とのみよて以心傳心の宗匠はなかりしに梁の代に達磨大師渡りたまひて眞の佛法を傳たまひぬ唐土も我國も四百年はと經たる後に眞の佛法の傳はれるも亦た不思議なりと答たまひけり然れば學道用心集。普勸坐禪儀。辨道法の典座教訓。衆寮清規。知事清規等は更なり正法眼藏の百卷も廣録の御垂戒も大方の興聖寺よての御教示なりしとぞ斯て是年の十二月十七日に波多野出雲守藤原義重の招請にて其宅へ赴かせたまひて御說法あり此人は大職冠鎌足公の遠孫にて田原藤太秀郷十九代の孫なれば鎌倉將軍の御内にて弓馬も名高き人なるが深く大師に歸依しまへらせければ其知行所の内にて越前國吉田郡の山奥も清閑なる古寺あるを再興して大師も寄附したてまつりたさ由申されけるに大師の御師匠なる唐土天童山の如淨禪師は越と云る處の御方なりしかは今その越州と云ふ名を聞くだに懐しきに況て此深卿は都も近き處なれば公卿其他の訪ひ來るも中々にうるさし濟度の方便は然ることながら早や說法に赴きたる大家の數も百箇所に餘り菩薩戒を授けし弟子も二千餘人に及びり然れば縁ある人々よ





山の石橋に顯はれたまひし其後は曾て聞も及ばざる靈感なりとて皆々信心肝に銘じけり斯く世に比類なき道徳の聞え忽ち天聽又達せしかは建長元年庚戌大師年五十一の年の事とかや太上天皇後醍醐勅使を以て紫衣を賜はりしを辞み申せと許したまはざりければ「永平雖ニ谷淺ニ勅命重々。却被ニ猿鶴笑。紫衣一老翁」と詩を賦して勅答したてまつり遂に其紫衣を召させたまはざりしとぞ然るに斯る高德の御方にも免れさせたまふとの叶はざるは無常にて建長四年壬子大師年五十三の夏の頃より聊か病の兆みえさせたまひ最後の教悔よとて釋迦牟尼如來の御臨終に説せたまへる遺經教に本きたまひ八大人覺と云ることを述させたまひけり斯て翌年建長五年癸丑七月十四日に永平寺をば孤雲懷裝禪師に譲らせたまひ八月五日に京都へぞ上りたまひける是は御親戚の久我家其他を始め波多野義重等が御病氣の由を聞て御療治のみは都こそとて頻に促したてまつりしかば孤雲禪師も伴はせたまひ徹通和尚をば木の目山より永平寺へ還したまひけり其時「草の葉に門出せる身の木の目山雲に路ある心地こそすれ」と詠せたまひしも早や御遺言にやとて人々涙に咽びけりとなん斯て京都高辻西洞院の俗弟子覺念が家に宿らせたまひ

太上天皇より遣はさせられたる御醫師の診察をも受させたまひしが或日室内を經行せたまひつゝ若於園中若於林中若於樹下若於僧房若白衣舍至當知是處即是道場至諸佛於此轉於法輪諸佛於此而般涅槃と云る法華經の文を唱させたまひ又此文を面前の柱又書付たまひけり此在家の白衣舍にて涅槃したまはんとお思召なればなり斯て八月廿八日の子の刻に「五十四年。照ニ第一天。打ニ箇躡跳。觸ニ破大千。嘆。渾身無ニ着處。活陷ニ黃泉。」と云る偈を書たまひ掩然として入滅したまひしかば御親戚は更にも言ず波多野義重及び覺念を始め在家出家の御弟子等皆々悲嘆に沈みたる其中に孤雲禪師は暫しが程氣絶してぞおはしける偈であるべきに非ざれば御遺骸を東山に移し奉つり赤築地と云る處にて火葬しまへらせ九月六日に御舍利を收めて京を出で十日又永平寺へ着し十二日に入般涅槃の儀式あり本山の西北隅に葬り奉つりて御廟をば承陽庵と名けたてまつり孤雲禪師は其側に庵を結び自ら朝夕の供養に給仕したまひけり斯て大師御入滅の後御法孫ますく繁昌し中にも太祖瑩山國師出させたまひてより其御流いよく廣く今は天下に御一派の寺の數さへ二方に近く御徳ますく熾んなれば嘉永五年壬子八月二十

八日に六百回御遠忌を永平寺よて行はせたましひとさ先帝孝明天皇の勅詔にて佛性傳  
東國師と云る謚號を贈らせたまひ又今上皇帝陛下は明治十二年の十一月に承陽大師と  
謚號を贈らせたまひ宗旨の光り君が代と共に四海に輝くは誠に尊き次第なりけり

○承陽太師御和讚

歸命頂禮祖師菩薩 悟本大師の再來と 如淨禪師の夢にみへ  
吾國洞家の宗祖なり 村上天皇九世の孫 久我内大臣通親の  
御三男にぞおはしける 母ハ攝政基房の 御息女にてましませり  
南無大師承陽尊  
時に虚空に聲ありて 大聖人とまらせけり 正治二年に降誕し  
眼に重腫ありしとぞ 四歳に李嶠か詩を詠し 八にて母の亡給ふ  
けむりに無常を悟らしめ 求法の請願おはします

南無大師承陽尊  
御伯父關白師家ハ 猶子となして重職を 續しめ給ん意にたがひ  
十三歳の春の夜に 志のびて比叡の麓なる 舅良觀の室にかり  
母君菩提のためにとて 遁世あるこそ有難き

南無大師承陽尊  
建保卯月の九日に 公圓座主の位に就て 得道戒壇とげ給ふ

御歳十五に法性の道理を論じ三井寺の公胤僧正の指揮をうけ  
榮西禪師に参ぜらる 二祖明全を師とたのみ 精修に九歳を経給

南無大師承陽尊

廿四歳の春のころ 全師と共にはるかなる 宋土にわたり明州の  
諸山の風儀に伺はる 秋七月に天童の無際禪師に相見し  
法臘列位みだるゝを 寧宗帝に上奏し 終に戒次を糺さるゝ

南無大師承陽尊

寶慶元年仲の夏 如淨禪師に参見し 機縁にかなひ道を得て  
室中相傳了畢し 江西行脚におん杖の 龍頭と化して虎を追ふ  
碧巖書寫の夜半には 白山權現助筆ある

南無大師承陽尊

韋駄將軍のすゝめにて 歸朝の纜解せらる 南海風波の難をさけ  
肥後川尻に着玉ひ たらに都の建仁に みとせを経給ひ深草の  
閑居に吟ある夜雨の聲 佛法御房と稱しける

南無大師承陽尊

天福元年四月にハ 興聖禪寺をひらかしめ 弘法十年にみち給ふ  
波多の義重進むれハ 越前志比にぞ下向あり 寛元二年に永平寺  
建立あれハ草も木も 吉祥瑞をあらはせり

南無大師承陽尊

説法布薩のその時ハ 華ふり彩雲たなひけり 最明寺殿時頼ハ  
請して戒法請るゝ 褒録寄進の命有ど 固辭して使僧を罪せられ  
床の地七尺捨給ふ 後嵯峨の帝御紫衣を 賜ど身に觸ましまさず

南無大師承陽尊

正法眼藏涅槃心 九十五卷に止まりて 微恙にかゝらせ玉ふより  
遺教經を開示ある 王公親族請あれど 西の洞院高辻の  
覺念宅にぞ入玉 今霄の月の御詠には かんじて寤れやハする也

南無大師承陽尊

上皇醫官よ勅せられ 診候とりくありしかど 建長五年丑の秋

八月二十八日に 妙法蓮華經庵と 御筆を染させ偈を殘し  
御年五十有四にて 涅槃の寂土に入給ふ

南無大師承陽尊

御茶毘式は東山 赤築地にて執行ある 舍利をわかちて越の山  
承陽庵にを納らる 其みなもとの谷深く すめるながれの末迄も  
たゞ安樂の法もんを つとめて菩提を求よと 如來の正法正傳を  
弘通まします大導師

南無大師承陽尊

十方三世一切佛諸尊菩薩摩訶薩阿般若波羅蜜 三拜

明治廿六年八月廿三日印刷

非賣品

全 年九月廿五日發行

東京府平民

著 作 者 大 内 青 巒

麻布區麻布北日ヶ窪町二番地

發 行 者 加 藤 水 月

芝區榮町三番地

印 刷 者 堀 井 安 太 郎

京橋區三十間堀貳丁目一番地

印 刷 所 明 教 社 印 刷 所

全區全町全番地

中華民國二十八年八月二十日

及中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國

中華民國